

国語

第3回 (11月)

テスト 時間	50分
-----------	-----

平均点 (都標準)	60点
--------------	-----

問題番号	正答率	問題番号	正答率	問題番号	正答率			
1	(1)	61.2	3	[問1]	65.8	5	[問1]	66.6
	(2)	75.5		[問2]	73.0		[問2]	51.5
	(3)	89.4		[問3]	72.9		[問3]	62.2
	(4)	92.5		[問4]	82.6		[問4]	44.1
	(5)	62.4		[問5]	6.9		[問5]	61.6
2	(1)	75.5	4	[問1]	50.6			
	(2)	86.7		[問2]	45.0			
	(3)	75.7		[問3]	57.3			
	(4)	76.2		[問4]	58.4			
	(5)	56.2		[問5]	3.4点			

注：4[問5]の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 山頂は酸素が希薄である。
- (2) 紅葉が夕日に映えて美しい。
- (3) 校長先生が優勝者に賞状を授ける。
- (4) 仕事を立て込んでいて多忙を極める。
- (5) 寺の境内はひと気もなく閑散としている。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 三色の絹糸で布をする。
- (2) 秋のオトズレを肌で感じる。
- (3) ライバル同士が互いにソンケイし合う。
- (4) 子供服をシユウノウするための箱を買う。
- (5) 試合の中止が決まった途端ヒニクにも雨がやんだ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

江戸時代中期、中津藩の医師前野良沢は、願い出てオランダ語習得のため百日間の長崎遊学を許され、多額の資金も受け取った。良沢は、大通詞の吉雄幸左衛門から話を聞き、オランダ語習得が簡単ではないことを知る。その後、良沢は幸左衛門を通じてマリンの辞書を入手したのだが……。

かれは、ため息をついた。全身から力が一度にぬけ出てゆくような絶望感におそわれた。

藩主昌鹿侯の慈愛にみちた眼が、思いおこされた。昌鹿は、良沢に特別の休暇をあたえて長崎遊学をゆるし、しかも窮迫した財政の中から過分な額の金もわたしてくれた。その金でマリンの辞書を購入したが、良沢には全く理解できぬ書物で、いわば藩主からたまわった金を無駄なものに消費してしまったことになる。

(1) かれは、行燈に灯もともさず畳の上に坐りつづけた。

女中の声に、かれは顔を庭にむけた。すでに庭には、夜の色が濃くひろがっている。その中で、箱膳を手にした女中がいぶかしそうにたたずんでいた。

かれは、翌日、海岸に出て石の上に腰を下ろし、海のかがやきを放心したように見つめていた。

湾口に浮かぶ高銚島の方向からわたってくる風は冷たく、かれの髪をふるわせていた。

マリンの辞書をひらいた時のほげしい絶望感、恐怖感に通じるもので

あつた。かれは、妻と子を思った。生まれつき寛容な性格の妻の顔には、絶えずやわらいだ微笑がたたえられている。息子の達^{たつ}の眼には、けがれなくいきいきとした光がみちている。かれらは、人間として健^{けん}氣^{けい}に生きているが、海岸で一人坐っている自分は、かれらの夫であり父である資格はないように思えた。

「良沢殿」

不意に、背後から声がかかった。

振りかえると、榎林^{ならばやし}栄左衛門が立っていた。

「こんな所におられては風邪を引きますぞ。長崎は雪の降らぬ町ではござりませんが、やはり冬の風は冷たい。いかがでござる。拙宅に参られぬか、あたたかい芋粥^{いもがゆ}を用意してありますから……」

栄左衛門は、近寄ると良沢の肩に手をおいた。

良沢は、立ち上がった。寒気の中で長い間坐っていたため、足がしびれていてかれはよろめいた。

太鼓をたたいた門付け^{かどづ}が、かたわらをすぎると露地に入つてゆく。その露地の家並にも、初午^{はつごま}の幟^{のぼり}が林立していた。

栄左衛門の家におもむくと、妻女がすぐに盆にのせた芋粥を手に部屋の中へ入つてきた。それは白米の粥に琉球芋^{りゅうきゅういも}を入れて煮たもので、良沢にははじめて口にする食物だった。

湯気のたつ粥は芋の甘みとふりかけた塩が微妙に調和してひどくうまかった。体の冷えも消えて、良沢の顔は上気したように赤らんだ。

「実は、幸左衛門殿から頼まれましたな」

栄左衛門は、箸をおくと口をひらいた。

「昨日、良沢殿はマリンの書を手入れた由ですが、拙宅に今朝使いがきて、幸左衛門殿のお邸^{やしき}によばれました。幸左衛門殿の申すには、マリンの書を読まれた良沢殿は、おそらく心もうちひしがれておられるにちがいないと……。それで、私に良沢殿の様子をみてきてほしいと言われました。私は、承知してすぐに貴殿の部屋にゆきましたが、お姿が見えず、あちこちさがした末、ようやく貴殿が海岸におられるのを見出した次第でござります」

栄左衛門の顔に、笑いの表情がうかんだ。

良沢は、苦笑した。

「いかがでござるか。眼の前が暗くなられたのではござらぬか」

「いかにもその通りです。参りました」

良沢は、うなずいた。

③ 栄左衛門の顔に、可笑^{おか}しそうな表情がうかんだが、すぐに笑いの表情は消えた。

「良沢殿、すでにお気づきのことと思われませんが、われら通詞はオランダ人と話すことはできても、オランダの書物を読み理解できる者などおりませぬ。わずかに吉雄幸左衛門と亡^なくなられた西善三郎殿ぐらいがそれを辛^{から}うじてはたせたと申しても過言ではありませぬ。しかも、幸左衛門殿、善三郎殿とて自在に読めるなどというものではなく、闇の中を手さぐりするようにあれこれ思案しておよその意味をつかめるだけに過ぎぬのです。そこでマリンの書についてでござるが、私なども到底理解することはできません。それを失礼ながら貴殿が読解できるはずはなく、もしもマリンの書を眼にして失望なされたとしたら、それは僭越^{せんえつ}と申すもの。西善三郎殿は、

勇をふるってその翻訳を志しましたが、それは非常な御苦しみであった由で、その仕事は西殿の命をちぢめたと噂うわさされているほどです」

栄左衛門の顔には、自分の無力を悲しむ色があらわれていた。そして、眼を伏せると煙管きせるをとり上げ、煙をくゆらせた。が、一服すると、かれの顔はやわらいだ。

「幸左衛門殿は、マリンの書をお渡ししたものの貴殿の身を案じられておられるのです。がっかりしておられるだろうが、決して気を落とされぬようつたえてほしいと申されました。それから、こうも申しておられた。長崎では、ただ驚かれるだけで十分である。大いに驚かれるがよい。勉強は江戸におもどりになってからするべきだ……と」

良沢は、背筋をのびし眼を栄左衛門の顔に向けた。「長崎ではただ驚かれるだけで十分」という幸左衛門の言葉を胸むねの中で反芻はんすうした。⁽⁴⁾ 暗雲が一時にぬぐい去られたような気分であった。

幸左衛門は、数日前にも同じような忠告を口にしたが、良沢にはいっそうはつきりと幸左衛門の言葉の意味が理解できたような気がした。すべては、江戸にもどってからの勉強……という幸左衛門からの伝言が、素直に受けいれられた。

⁽⁵⁾ 良沢は、急に胸に熱いものがつきあげてくるのを感じた。幸左衛門も栄左衛門も、自分のことを親身になって気づかってくれている。異郷の長崎にきて、このような人間の温かい情にふれたことが、かれには嬉うれしかった。

(吉村 昭「冬の鷹」による)

〔注〕 大通詞おおつうじ——通詞は長崎にいたオランダ人との通訳を行う役人で、

大通詞はその役人の長官。

マリンの辞書——フランス語をオランダ語で解説した辞書。

門付け——人家の門口に立って歌や踊りなどの芸能を演じ、金

品をもらい受ける人。

初午はつごま——二月の最初の午の日。この日に稲荷神社で祭礼が行わ

れた。

僭越せんごつ——地位・立場を越えて、出過ぎたことをすること。

反芻はんすう——一つのことを繰り返し考え、よく味わうこと。

〔問1〕 ⁽¹⁾ かれは、行燈あんどんに灯ひもともさず畳たたみの上に坐りつづけた。とあるが、

この表現から読み取れる良沢の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア オランダ語の知識を全く持たない自分がマリンの辞書を購入しても無意味だったことに気づき、自らの浅はかさを恥じている様子。

イ 購入したマリンの辞書でオランダ語を勉強するという計画が崩れ、明日からの長崎遊学をどのように過ごそうかと悩んでいる様子。

ウ 期待をかけて送り出してくれた藩主の尽力を無駄にしてしまい、現実げんじつに愕然がくぜんとし、時間がたつのを忘れてしまっている様子。

エ 藩主から課された自らの目標を達成できそうにないことを悟り、江戸に帰った後の自分の居場所がなくなることを恐れている様子。

〔問2〕 ⁽²⁾ かれらは、人間として健気けんげに生きているが、海岸で一人坐すわっている自分おれは、かれらの夫であり父である資格はないように思えた。と

あるが、このときの良沢の気持ちに最も近いものは、次のうちでは
どれか。

ア オランダ語の習得という目標のために立てていた自らの計画の甘さに
ぶつかり、すっかり気弱になってしまっている。

イ これまでの努力が水の泡となったと思い、今後どうするかの見通しも
立たず投げやりな気分になってしまっている。

ウ 自分の目標を異郷の地の人々に理解されず、今後の研究にも協力が得
られそうにないので落ち込んでしまっている。

エ 目の前に立ちはだかる困難があまりに大きく、自分の無力さにうちひ
しがれて孤独のふちにおちいってしまっている。

〔問3〕⁽³⁾ 栄左衛門の顔に、可笑しおほかそうな表情がうかんだが、すぐに笑いの
表情は消えた。とあるが、栄左衛門の表情が変化したわけとして最
も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 素直に自分の弱さを認める良沢をほほえましく思うと同時に、あえて
ここで良沢に厳しいことを言うために気を引きしめたから。

イ すっかり気落ちしている良沢の心の弱さにあきれると同時に、そんな
ことでは今後が思いやられると気合いを入れたかったから。

ウ きまじめで研究熱心な良沢の志の高さに感心すると同時に、自分こそ
が良沢の力になり共に目標を達成したいと意気こんだから。

エ 簡単にはくじけそうにない良沢の意志の強さに安心すると同時に、新
たな目標をかかけて良沢をさらに鍛えようと決心したから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 暗雲が一時にぬぐい去られたような気分であった。とあるが、こ
の表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではど

れか。

ア 栄左衛門の忠告を聞き、心を入れ替えて勉学に励もうとする良沢の姿
を、周囲の風景とともに視覚的に表現している。

イ 良沢の抱いていた絶望感が栄左衛門の言葉によって一気に希望へと変
化するさまを、比喻を交えて印象深く表現している。

ウ オランダ語を習得して、異国の医学書を読み解く瞬間を想像する良沢
の気持ちを、簡潔な文で端的に表現している。

エ 良沢を温かく迎え入れた栄左衛門の家庭のかもしれない和やかな雰囲気
を、良沢の感覚を通して幻想的に表現している。

〔問5〕⁽⁵⁾ 良沢は、急に胸に熱いものがつきあげてくるのを感じた。とある
が、このとき良沢が自分の気持ちを栄左衛門に伝えるとしたら、ど
のように言うと考えられるか。良沢の気持ちを読み取り、話す言葉
を四十字以上五十字以内でまとめて書け。なお、や・なども、そ
れぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

さまざまな科学技術や社会制度が発展し、安全で清潔な社会ができあがってくると、知らず知らずのうちに、そのような「快適さ」が当たり前のことになってくる。平均寿命は著しく延び、生活水準が上がり、飢餓とは無縁で、娯楽にも事欠かず、その気になれば誰でも安いチケットで世界中を旅行できる、そういう豊かな社会になると、人々はさらなる豊かさを求めるよりも、今の幸福を失いたくないと感じるようになるものだ。その結果、人々は「リスク」に敏感になる。環境汚染や食品安全、治安の問題に敏感なのは、豊かな先進諸国に共通する現象なのだ。(第一段)

同時に、科学技術の発展と諸制度の高度化は、世界を便利で快適にするとともに、それまで考えられなかったような新たなリスクをもたらしている。たとえば、グローバル化によって世界が、物的・人的・情報的なつながりを強めれば、遠隔地の新型ウイルスや経済破綻、あるいは国際的なテロリズムが、瞬く間に、ローカルな日常生活を生きる人々の生活を脅かしてしまう。そんなことは、つい最近まで起こりえなかったことだ。(第二段)

このように、⁽¹⁾徹底した近代化によって社会が豊かになることにより、リスクが目につくようになる認識論的な変化、そして、近代化そのものの副産物として、新たなリスクが出現するという存在論的な変化、この両方の変容によってリスクが社会の中心的課題になっていく、そのような社会をドイツの社会学者ベック (Ulrich Beck, 一九四四～二〇一五) は「リスク社会」と名付け、世に問うた。一九八六年のことだ。(第三段)

さて、社会がこのステージに入ると、さまざまな新しい徴候が観察され

ることになるが、その一つの側面として、「リスクの個人化」という現象がある。(第四段)

従来^{*}の福祉国家のモデルにおいては、人々が被るリスクは、国家を中心として公共的に解決されることが基本とされた。かつての「資本主義陣営」であっても——アメリカはともかく、少なくとも日本や欧州では——、社会保障や産業育成などは、社会全体でおおむね合意された目標を参照しながら、計画的に進められる傾向が強かったといえる。そこではいわゆる「大きな政府」^{*}が志向されたが、豊かさを実現することが社会の共通課題である間は、特に問題にはならなかった。右肩上がりの時代には、皆が同じ未来を夢見ることが比較的容易だから、社会を計画していくという傾向が強まるのは理解できるだろう。(第五段)

しかし、社会が現実には豊かになり、また高学歴化も手伝って価値観も多様化していくと、人々はより個性や自由を求めるようになっていく。だがそもそもリスクとは、自由な判断に伴う危険性のことでもある。個人の判断が多様化していくと、それに伴って発生するリスク課題も、膨大かつ複雑になっていき、公共的なリスク処理のシステムでは追いつかなくなってくる。その結果、顕在化してくるのが自己決定、自己責任のルールなのである。(第六段)

「ツアー」の例で考えると分かりやすい。かつての「団体バック旅行」に満足できなくなった「意識の高い消費者」の多くは、移動のチケットと宿だけがセットになっていて、現場で自由に行き先を決められる「個人旅行プラン」を選ぶようになった。その結果、自由行動中のトラブルは基本的にすべて消費者自身が解決しなくてはならなくなった。(第七段)

また、たとえ同じツアーに参加していたとしても、個人旅行の参加者が

一緒に何かをすることはないし、何か共通のルールを守る必要もない。もし仮に旅行会社が、「夕食後は皆で花火大会を行います」などと共通のしほりをかけようとしてもしたなら、すぐさま参加者から不満が噴き出すだろう。「自由参加にして欲しい」と。だから「余計な」ルールはほとんど決めることができない。全ては「オプショナル」*でなければならぬ。(第八段)

そういう状況が、社会のあらゆるシーンで起こっている。問題は、政治は「オプショナル」というわけにいかない、ということだ。この社会を担う、権利と義務は、基本的にメンバー全員にある、というのが、民主主義の大前提だからである。その結果、あらゆる公共的な意思決定が、いつも採めるようになっていく。⁽²⁾もしここで「全会一致主義」*などを選ぶものなら、何一つ、まともな決定はできないだろう。(第九段)

「それでも、科学的な判断に任せることは、一つの解決の道ではないのか？」このように考える方もおられるだろう。これはある意味で、依然として正しい。しかし同時に、科学的判断が難しい領域にこそ、リスクの問題が目立ってくるという傾向があるのもまた、事実である。(第十段)

たとえば、なぜ、福島第一原子力発電所の事故に伴う、低線量の放射線が問題になるかといえば、百ミリシーベルト以下の放射線の健康リスクについて、科学者の見解が割れているからである。いや「割れていない」と考える専門家の方が多いかもしれないが、仮にそうだとしても、低線量の放射線をどの程度恐れるべきなのか、そして行政はどのように対応すべきか、という問題は、そもそも科学の領域だけで決められるものではない。

(第十一段)

というのも、低線量放射線のリスクはその典型例だが、リスク社会で問題になるようなイシュー*は、確率論的に捉えるよりほかないものがほとんどだからである。そこでは、確率が少々高くても、運が良ければ影響はないし、運が悪ければ、低リスクでも被害を受ける可能性がある。逆に、リスクがはっきりしているケースについては、迷うことなく、対処法が決まる。たとえば、汚染が強すぎる地域は立ち入り禁止になる。議論の余地はない。だからそういう部分は、少なくとも政治問題にはならない。(第十二段)

ある意味で自明なことだが、科学的によく分からないことから、政治問題になる。これはしかし、見かけ上、「化学の非力さ」を社会に示してしまう格好にもなる。リスク社会は、科学を担う者にとっても辛いだろう。「できなかった問題」ばかりに社会は注目するからだ。90点でも、99点でも、「なぜ満点でなかったのか？」と叱責され続けられ、いずれ心も折れるだろう。(第十三段)

こういう状況に対して、行政が前のめりに「専ら科学に基づく判断を」*と標榜してしまおうと、立ち往生することが約束されてしまう。実際のところ行政は、せいぜい、以下のように振る舞うのが限界なのだ。まず、責任を背負い込みすぎることのないよう、できるだけ早期にリスク情報を公開し、また、当該問題を熟知する多様な専門家を集め、議論を主宰する。そして可能な限り妥当な(しかしおそらくは強制力が弱い)ガイドライン*を設け、個々人に最終的な対応を任せるのである。(第十四段)

現実には、色々な境界条件があつて、そのような「理想状態」にないこ

とがほとんどだが、仮にシステムがどんなに充実したとしても、最後は、リスクは個人に降りてきてしまうだろう。⁽³⁾ 根拠のよく分らない確率の数字だけを示されて「自己責任」で判断するのだから、結局は人生観の問題になる。そして、どういう結果が出て、その決定の重みを個人が、個人的に、背負うことになるのである。(第十五段)

(神里達博「文明探偵の冒険」による)

〔注〕 グローバル化——国家、地域などの境界を超え、地球全体を一

つの単位として考える動向。

ローカルな——その地方に限定されていること。ここでは「グ

ローバル」の対義語として用いられている。

福祉国家——国民の生存権を保障し、福祉を平等に分配するた
めに、人々にふりかかるリスクを公共的に解決する
ような国家形態。

大きな政府——政府が経済活動に積極的に介入し、社会的な福
祉基盤を作り、所得格差を小さくすることで、国
民の生活を安定させようという方策。

オプション——ここでは、必要最低限のサービスとは別の、利
用者が自由に選ぶことのできる選択項目のこと。

イシュー——争点、論争になりそうな事柄。

標榜^{ひょうぼう}——自分がそういう主義・立場・姿勢であることを公然
と表すこと。

ガイドライン——政府や団体が示す大まかな指針。

〔問1〕⁽¹⁾ 徹底した近代化によって社会が豊かになることにより、リスクが
目につくようになる認識論的な変化、とはどういうことか。次のう
ちから最も適切なものを選べ。

ア 生活水準が上がり、社会が豊かになると、その幸福を失いたくないと
思うために、それまで気にならなかったリスクが表面化すること。

イ 科学技術や社会制度が発展し、安全で清潔な社会ができると、さらな
る豊かさを求めることになって今までになかったリスクが生じること。

ウ グローバル化によって世界が物的・人的・情動的なつながりを強める
ために、互いの接触する機会が増えてリスクが高まること。

エ 科学技術の発展や諸制度の高度化により、世界規模のできごとが日常
的に個人にまで及んでくることで新しいリスクが生じること。

〔問2〕 この文章の構成における第五段の役割を説明したものとして最も
適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた近代化と「リスクの個人化」の関係を受け、そ
の因果関係を整理するとともに、新たな観点から問題を提起している。

イ 前段であげた「リスクの個人化」という現象に対し、リスクに公共的
に対処できた時代を対比させ、個人化の要因を探る前提を提示している。

ウ それまでに述べてきた近代化による「リスクの個人化」について、別
の視点から検討することによって、わかりやすく整理し直している。

エ 前段であげた「リスクの個人化」の原因に関して、その根拠となる過
去の社会的な事例を付け加えることで、自説の妥当性を補強している。

〔問3〕⁽²⁾ もしここで「全会一致主義」などを選ぼうものなら、何一つ、ま
ともな決定はできないだろう。とあるが、筆者がこのように述べた

のはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 個人の自由な判断が多様化する一方、社会を担う権利と義務はメンバー全員にあるので、全員の意思を一致させることは不可能に近い、と考えたから。

イ ひとりひとりが自由や個性を求めるために、全員に社会を担う権利と義務がありながら公共的な意思決定に参加しなくなっている、と考えたから。

ウ 近代化に伴って社会的に自己責任、自己決定のルールがすべての前提になっているために、公共的な意思決定ができなくなっている、と考えたから。

エ 社会を担う権利と義務はメンバー全員にあっても、すべての人に公共的な意思決定に参加するよう強制することはとうてい無理だ、と考えたから。

〔問4〕⁽³⁾ 根拠のよく分からない確率の数字だけを示されて「自己責任」で判断するのだから、結局は人生観の問題になる。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 行政は科学的な根拠のないガイドラインを示すだけなので、結局は個人が科学的な確率を算出してリスクの判断をするしかないということ。

イ リスクが科学的によくわからなくても、確率の数字だけは示されるので、その数字を信じるか信じないかで人生が変わってくるということ。

ウ リスク社会での問題はほとんど確率論的に捉えるしかないので、各個人が行政に頼らず自己責任で確率を考えるのが当然であるということ。

エ リスクの情報は最終的に安全を保障するものではないので、リスクを

どう受けとめるかは、個人の生き方や考え方によるしかないということ。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「自由と自己責任」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・や「なども、それぞれ字数に数えよ。

次の対談を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

佐佐木 ところで、今日お話を伺おうと思ってきたのは、昭和四十年代、高度成長期以降、日本の若者たちがずいぶん変わってきている。端的に言ってしまうと、『古今集』や『新古今集』がわかる時代になってきたと思うのですが、どうでしょうか。『古今集』は遊び心がありますでしょうか。

久保田 ええ、あります。

佐佐木 若い人たちにやっと、文学というのは学校の勉強ではなくて遊びだという考えがずいぶん出てきている。『古今集』がまずわかります。『新古今集』については、基本的に『新古今集』の新しさおもしろさは、「気分きぶんの文学」というか、それだと思いのです。それが今の若者にはわかる。村上春樹はるきから吉本よしもとばななまで読まれている現象、気分きぶんなのですね。そこに流れている気分、『新古今』の持っている気分としか言いようのないもの、それがわかるようになってきているのではないのでしょうか。僕自身のことを考えても、遊びとか気分きぶんというものが身ア近アにわかりはじめたのが十年、十五年くらい前の感じがします。

久保田 その点ではお若いですね(笑)。いや、僕なんかは本当に遅れていると思いますよ。やっぱイり自分も気分きぶんで入ったのかなあ。そうではないと思うとしていられるんですけど、なぜ自分ウが『新古今』に入ったのかを考えると、何となしに入っただけという感じなんです。

佐佐木 最初は定家あきでいらっしやるのですか。

久保田 いや、家隆いえたかです。最初は定家ではないのですよ。だから『新古

今』の中でも最も流れる調べのほうで(笑)、今から考えてみると、やっぱ気分きぶんなんでしょう。今頃になって、それだけはいけなエいなんて思い出して、どうも時代エに遅れてますね(笑)。

佐佐木 たとえば、学生たちにこういう言い方で言います。余情妖艶だの醍ち味みなんていうのは、要するに気分きぶんなんだ。⁽¹⁾気分きぶんとしか言いようのない現実に出合ったり、場面に出合たりする、それをどう言葉化するかというところに彼らは情熱を賭けたんだ、と言うとわかるんです。だから、

思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る

なんていう、すごいデリケートな世界を発見できる。こういうふうな言い方をすると、最近の学生はよくわかる。「霞かすみを分けて春雨ぞ降る」、これはすごい言葉ですね。

久保田 俊成しゅんせいだったかな。

佐佐木 ええ、俊成しゅんせいですね。

久保田 恋の歌ですね。あれはいい歌だ。恋女房に贈った歌でしょうね。

佐佐木 春雨だから、降ってくるのもぼうつと降ってくるわけで、しかも霞のようなものを分けて降ってくる。これは日本の雨でないと駄目だめなんです。スコールが降ってくるような大陸では駄目。こういうデリケートな気象状態を、デリケートな言葉で表現しているということは、すごいと思うんです。

久保田 ああ、そういう感覚は今の若い人にわかるでしょうか。

佐佐木 こういう気分きぶんというのは、わかるようになりました。

⁽²⁾**久保田** それは頼もしいですね。ただ研究者はどうか、わかっているのかなあ(笑)。同業者に対してそういうことを言うと、これは天に唾つばす

るようで自分に返ってくるのですけど、さつきから話題になっっている索引や、さらにコンピュータ全盛の時代だと、ただ検索すればデータがどんどん出てきてしまうので、そういう気分はわかってくれないのではありませんかという心配が出てくるのです。

佐佐木 今は、^{*}ポエムに意味を求めるとか、生命力や昇っていくものを求めるとかではなくて、何だかわからないけれど何かふわっとした曖昧なもの、無いのではなくて何かあるのだけど別に意味も無い、あつてどうってことないのだけど有る、そういうものがおもしろいという感じはずいぶんわかってきた。

久保田 ああ、そうですね。

佐佐木 『新古今』の人たちはそうですね。未来に対して何か展望が開けているわけではないし、現在発掘すべき何かがあるのでもない。しかし無常感にいくのでもなくて、何かがふわっとあるんだという感じですね。それを形象化できればという、非常に高度な感性があつたのだと思うのです。

たとえばこの歌は、^{*}寂蓮法師ですけれども、

A 暮れてゆく春のみなどはしらねども霞に落つる宇治の柴舟^{しばふね}

和歌的な美意識、

B ほのぼのと明石^{あかし}の浦の朝霧に島隠れ行く船をしぞ思ふ『古今集』と同じような美意識と言えるかもしれないけれど、「落つる」という言^③い方が、これはちよつと違う感じ、何か異郷に消えていくというようなものではなく、もっと違う趣がある。

久保田 僕もこの歌好きなんです。「霞に落つる」というのは、ずーっと消

えていくのじゃなくて、ぼつと視界から消えてしまう感じ、「あれっ、消えちゃった」という感じですね。

佐佐木 そう、だからどうだというのではない。意味はいらなのです。

久保田 今まで目の前にあつたのが、ぼつと消えちゃった。

佐佐木 それが無常感にいくとか、異郷に臨んだとか、そういう大袈裟なものじゃない。

久保田 それはわかります。

佐佐木 そういう無意味のおもしろさみたいなものが、現在いろいろな形で見えてきはじめた。

久保田 そうするとこの歌なんていうのは、現代非常にわかる。

佐佐木 新しいのではないかと思えます。

久保田 なるほどね。⁽⁴⁾この歌は前から好きだったんだけど、その良さというのとはそういうところにあつたんだ。

佐佐木 ええ、気分というものが、僕らの世代とは違うような形で、若い人たちにわかりはじめたというのが実感ですね。

(久保田 淳「暁の明星」による。対談相手は佐佐木幸綱。)

〔注〕 定家——藤原定家(一一六二—一二四一)。鎌倉時代初期の歌人。

家隆——藤原家隆(一一五八—一二三七)。鎌倉時代初期の歌人。

余情妖艶——定家の歌論にみられる用語。平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての和歌において、特徴的な言葉の裏に漂う豊かな情趣、余韻、奥深く味わいのあるさまをいう。

俊成——藤原俊成(一一一四—一二〇四)。平安時代後期から

鎌倉時代初期の歌人。

ボエム——一編の詩。

寂蓮法師——一三九ごろ〜一二〇二。平安時代末期から鎌

倉時代初期の歌人。

〔問1〕 本文中の〓を付けたア、エの単語のうち、他と品詞の異なる

ものを一つ選び、記号で答えよ。

〔問2〕⁽¹⁾ 気分としか言いようのない現実に出合ったり、場面に出合ったり

する、それをどう言葉化するかということに彼らは情熱を賭けたんだ、とあるが、「彼ら」、つまり新古今の人たちにそのことが可能であったわけを述べた次の文の□に入る言葉を、佐佐木さんの発言の中から十九字でそのまま抜き出して書け。なお、も字数に数えよ。

何だかわからないが何かふわっとした曖昧な、別に意味なものも□があったから。

〔問3〕⁽²⁾ 久保田さんの発言の、この対談における役割を説明したものと

して最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 新古今和歌集の特徴について、相手の意見に反する考えを提示することで、対談の内容に変化をもたせている。

イ 新古今和歌集の内容について、相手の考え方に賛同しながらも新しい見方を述べることで、話題の転換を図っている。

ウ 新古今和歌集の理解について、相手の意見に共感しつつ別の視点から話題を提示することで、気になる点を指摘している。

エ 新古今和歌集の見方について、相手の考え方を言葉を変えて言い直すことで、話題を絞って対談を方向づけている。

〔問4〕⁽³⁾ 「落つる」という言い方が、これはちよつと違う感じ、とあるが、AとBの歌の「ちよつと違う感じ」について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア Bの和歌では、朝霧が島に隠れる船を追っていく感じだが、Aの和歌では、舟が進むことで霞がぼつと消える感じ。

イ Bの和歌では、船の姿が霧の中に次第に消えていく感じだが、Aの和歌では、霞が舟を一瞬のうちに隠してしまう感じ。

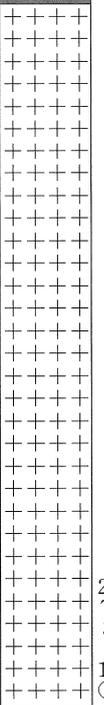
ウ Bの和歌では、一面の霧の中にぼんやり船の姿が見える感じだが、Aの和歌では、霞の中を舟が突き進んでいく感じ。

エ Bの和歌では、ほのぼのした霧に船が包まれていく感じだが、Aの和歌では、霞がかかって視界に舟が入らない感じ。

〔問5〕⁽⁴⁾ この歌は前から好きだったんだけど、その良さというのはいくらもところにあつたんだ。とあるが、「そういうところ」にあたる内容を、対談から十字以内で抜き出して書け。

《国 語》

偏差値	第1回 (9月)	第2回 (10月)	第3回 (11月)	第4回 (12月)	第5回 (1月)
76	96	95		97	96
75	94	94		96	94
74	92	93	100	94	93
73	91	92	98	93	92
72	89	91	97	92	90
71	87	90	96	91	89
70	85	88	95	89	88
69	84	87	93	88	87
68	82	85	92	87	86
67	80	84	90	86	85
66	78	82	88	84	84
65	77	80	86	82	82
64	75	79	85	81	80
63	73	77	83	79	79
62	72	75	81	77	77
61	70	74	79	76	76
60	68	72	77	74	74
59	66	70	76	72	72
58	65	69	74	71	71
57	63	67	72	69	69
56	61	66	70	68	67
55	59	64	69	66	66
54	58	62	67	64	64
53	56	61	65	63	63
52	54	59	63	61	61
51	52	57	61	59	59
50	51	56	60	58	58
49	49	54	58	56	56
48	47	52	56	54	54
47	45	51	54	53	53
46	44	49	52	51	51
45	42	47	51	49	50
44	40	46	49	48	48
43	38	44	47	46	46
42	37	43	45	45	45
41	35	41	44	43	43
40	33	39	42	41	41
39	31	38	40	40	40
38	30	36	38	38	38
37	28	34	36	36	37
36	26	33	35	35	35
35	25	31	33	33	33
34	23	29	31	31	32
33	21	28	29	30	30
32	19	26	28	28	29
31	18	25	26	27	27
30	16	23	24	25	25
29	14	21	22	23	24
28	12	20	20	22	22
27	11	18	19	20	20
26	9	16	17	18	19
25	7	15	15	17	17



〔解答〕

- ①・② 2点×10 ③・④〔問1〕～〔問4〕・⑤ 5点×14 ④〔問5〕 10点
- ① (1) きはく (2) は(えて) (3) さす(ける) (4) たぼう (5) かんさん
- ② (1) 織(る) (2) 訪(れ) (3) 尊敬 (4) 収納 (5) 皮肉
- ③ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 エ 〔問3〕 ア 〔問4〕 イ 〔問5〕 幸左衛門様からの伝言をうかがって、心が楽になりました。温かいおもてなしをありがとうございます。(例)
- ④ 〔問1〕 ア 〔問2〕 イ 〔問3〕 ア 〔問4〕 エ 〔問5〕 別ページの解答例参照
- ⑤ 〔問1〕 ア 〔問2〕 形象化できればという、非常に高度な感性 〔問3〕 ウ 〔問4〕 イ 〔問5〕 無意味のおもしろさ

〔解説〕

③〔問1〕 傍線(1)の前の二段落で、良沢のこのときの心中について詳しく説明している。「マリンの辞書」を見て、オランダ語習得の困難さを実感し「絶望感におそわれた」良沢は、中津藩の藩主昌鹿侯のことに思いをはせる。オランダ語習得のために「休暇をあたえて長崎遊学をゆるし……過分の額の金もわたしてくれた」ことを思いおこし、その厚意を無駄にってしまったという現実に愕然としていたのだ。「行燈に灯もともさず」とは、日が暮れ、灯りが必要となったことにも気づかず、「畳の上に坐りつつづけていたことを表す。

〔問2〕 〔問1〕で見た「絶望感」という言葉がここでも繰り返されているように、良沢の苦悩は翌日も変わらず引き継がれている。「妻と子」のことをいとおしく思い出すものの、「自分は、かれらの夫であり父である資格はない」とあるように、妻子すらも遠い存在に感じるほど苦しんでいるのだ。

〔問3〕 直前の部分で、榮左衛門は良沢に対し、マリンの書を見て「眼の前が暗くなられたのではござらぬか」と指摘している。それに対し、「いかにもその通りです」と素直に認める良沢をほほえましく思ったが、すぐに良沢に「失礼ながら……僭越と申すもの」と、耳の痛い言葉を告げていることに着目する。傍線(3)の榮左衛門の表情の変化はこのためである。

〔問4〕 「暗雲が一時にぬぐい去られたような」の「……ような」という比喩の技法に着目する。「一時」は、「短時間で」の意味。「暗雲」は良沢の「絶望感」の比喩であり、それがさっと消えた、つまり晴れわたった空に変わったというイメージである。晴れ

た空が象徴するものは「希望」といってよい。

〔問5〕 傍線(5)の良沢の心情は、その前後の部分に書かれている。前の部分には幸左衛門の忠告を受け入れることができ、気持ちが軽くなったこと、後の部分には幸左衛門の言葉を伝え、温かくもてなしてくれた榮左衛門の心遣いに感謝していることが書かれている。その二点を押さえる。同趣旨正解。

【採点基準詳細】

- ・実際に会話としてそのまま口にするのできる部分をはっきり示していること。
- ・文末が「……から(理由を述べる形)」「……と思っている(気持ちの説明)」など、会話文と見なせない表現で終わっているものは×。
- ・合計5点の内容は、次のようにする。

①良沢が、自分に向けてくれた厚意に対して感謝の気持ちを持つていることが分かる表現が書いてある↓2点。

②榮左衛門と幸左衛門の両者が自分に対して気遣ってくれていることが書いてある↓3点。

5点獲得の例

・マリンの書では確かにうちひしがれておりました。それを見越して様子を見に来ていただけで感謝しています。(「マリンの書でうちひしがれているだろう」・「見越して」というのは幸左衛門からの伝言の中にある言葉なので、幸左衛門が心を寄せてくれていることへの気づきを表している、「様子を見に来ていただけ」は現に目の前にいる榮左衛門への感謝となっている。)

・私の体を気づかっていたの芋粥をありがとうございます。江戸に戻ったの勉強ということが良く理解できました。(今の芋粥をふるまってくれる気遣いに対する感謝+「江戸に戻って」は幸左衛門の伝言を理解したという感謝となる内容。)

・お二人で私のことを親身に思ってくれていること、温かい情にふれて感謝の言葉もありません。(具体的な内容はなく、直接「お二人」としているようなものでも可。)

・伝言をありがとうございます。おかげで、私がここに来たことが無駄ではなかったことがわかりました。(「伝言を……」と表記することで、②の要素とする。)

・ありがとうございます。皆さんのおかげで、いっそうオランダ語を学ぶ熱意を増すことができました。(「皆さん」は榮左衛門と幸左衛門の両者であることを表す。)

2点のみの例

・長崎ではただ驚けば十分という幸左衛門殿のお言葉がよくわかるような気がします。ありがとうございます。(幸左衛門に対するお礼の内容がわからないので、②の要素はなし。)

・わざわざ海岸まで探しに来てくれて、芋粥まで用意してくださったんですね。本当にありがとうございます。

・異郷の長崎で、自分のことを親身になって気づかってくれる人間の温かい情が本当に嬉しいです。

・マリンの辞書を見て絶望していましたが、貴方のおかげで勉学をあきらめずにいられます。感謝します。

3点のみの例

・私はマリンの書を見て本当に失望してしまいました。栄左衛門殿ですら理解できないのですね。(幸左衛門と栄左衛門の気づかいに気づいてはいるが、事実だけで感謝の言葉といえるものが明記されていない。)

×の例

・私などを長崎に遊学をさせていただき、過分な額のお金までいただきありがとうございます。(遊学を許可したのは藩主昌鹿侯なので、誤読で0点。)

・なかなか手に入らないマリンの書を手配をしてくださったおかげで入手できました。感謝しております。(前書きから、幸左衛門を通じてマリンの辞書を手にしたのは読み取れるが、ここで辞書を手したことだけを挙げてお礼を言うのは文脈上おかしいので0点。)

・私は長崎に来ることができ、本当によかった。一時は絶望を覚えました。が人の温かさに触れましたから。(「長崎に来られた」ことへの喜びでは方向性が誤っているので0点。)

4 [問1] 第三段で傍線(1)の「認識論的な変化」と、直後の「存在論的な変化」とが対比

されているが、それぞれ前者が第一段で、後者が第二段で詳しく説明した内容をまとめた表現である。「認識論的な変化」とは、第一段に書かれている、豊かな社会になったがゆえに、「今の幸福を失いたくないと感じるように」なり、その結果人々が、見えない「リスク」の危険性を案じるようになる(例Ⅱ環境汚染・食品安全・治安の問題など)ということだ。

[問2] 「リスクの個人化」という現象の要因は、後の第六〜八段で詳しく述べられている。第六段冒頭に「しかし」とあるように、第五段は「リスクの個人化」と対照的にリスクが「国家を中心として公共的に解決されることが基本とされた」時代について述べている。これとの比較を前提にして、第六段以下の「リスクの個人化」の要因を導き出しているのである。

[問3] 第六〜八段で、人々が「より個性や自由を求める」ようになる、個人の自由な判断に伴い、リスクが「膨大かつ複雑に」なっていくことが述べられている。その結果「自己決定、自己責任のルール」が顕在化したとあり、例として現代の「ツアー」について述べている。第九段では「政治は『オプシオン』(Ⅱ参加するかしないかを選ぶ)というわけにはいかない」、つまり「社会を担う、権利と義務は、基本的にメンバー全員にある」という新たな状況を述べている。「個性や自由」が尊重される時代に、

メンバー全員が「公共的な意思決定」に参加するとすると、当然、全員の意思が一致するようなことは不可能に近いことになる。

[問4] 第十二段で「低線量放射線のリスク」の例を挙げて、リスクの問題は「確率的に捉えるよりほかにものごと」と述べている。さらに第十三・十四段で、その確率が「科学的によく分らない」ものであるため、行政は「可能な限り妥当な(し)かしおそらくは強制力が弱い」ガイドラインを設け、個人に最終的な対応を任せるのがせいぜい限界であると述べられている。ここまで読むと、結局「確率の数字」は行政がその信頼性を保障してくれているわけではなく、信じるか信じないかは自己責任だということがわかる。そのことを「人生観Ⅱ個人の生き方や考え方」の問題だと述べているのである。

[問5] 別ページの解答例参照。

[問1] イ・エは用言を修飾し活用がない副詞。ウは後に「か」など疑問の形をとる「呼応(陳述)の副詞」である。アは終止形が「身近だ」で、「身近で」「身近な」などの活用形がある形容動詞である。

[問2] 傍線(1)の「それを(彼らⅡ新古今の歌人たちが)どう言葉化するか」ということについては、10ページ上段の最後の佐佐木さんの発言で再び話題にされている。『新古今』の人たちは……何かがふわっとあるんだという感じ……それを形象化できればという、非常に高度な感性があった」という部分に着目する。「形象化」とは、傍線(1)の「言葉化」と同意である。

[問3] ここまでで佐佐木さんは、『新古今』の持っている気分としか言いようのないものを今の若者・学生たちには「要するに気分なんだ」と説明することで「わかる」ということを述べている。これに対し、傍線(2)の久保田さんは「頼もしいですね」と共感しつつも、現代がコンピュータ全盛の時代であるため、「研究者」が、気分ではなく「データ」から理解しようとしているのではないかと思われる点に心配であると、別の視点から指摘している。

[問4] 傍線(3)の「これ」は、「落つる」という言葉を用いているAの歌の方を指していることをつかむ。その上で、直後の久保田さんの発言でAの歌について「……ずーっと消えていくのじゃなくて、ぼっと視界から消えてしまふ感じ、』あれっ、消えちゃった」という感じ」と述べていることに着目する。

[問5] 新古今和歌集の「良さ」についての、ここまでの佐佐木さんの発言をたどると、「気分としか言いようのないもの」「無いのではなく何かあるのだけど別に意味も無い」「何かがふわっとある」「意味はいらぬ」とあり、それが傍線(4)の四行前の「無意味のおもしろさ」に集約されている。これを受けて久保田さんも「そういうところに……」と述べている。

第3回(11月) 作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「自由と自己責任」というテーマで自分の意見を発表するのになさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験・見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にし自分の「意見」をまとめる。「意見」の中心を一つにしぼって書くよう心がける。
- 作文採点基準について(27年度都立入試後に公表された「部分点の基準」に沿っています)
 - ① 字数：百五十一字以上は減点なし。百五十文字〜百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上のものには得点を与えない。

文の冒頭や段落の頭は一字あける。必ず守ること。

方	す	た	す	こ	け	こ	以
が	。	ら	。	で	ま	で	前
も	。	、	こ	泳	し	泳	房
っ	。	安	れ	ぐ	た	ぐ	総
と	。	易	は	と	。	と	半
社	。	な	自	死	。	死	島
会	。	気	由	ぬ	。	ぬ	を
全	。	持	と	こ	。	こ	旅
体	。	ち	自	と	。	と	行
に	。	で	己	あ	。	あ	し
広	。	行	責	り	。	り	て
ま	。	動	任	ま	。	ま	い
っ	。	す	と	す	。	す	た
て	。	る	い	。	。	。	と
も	。	こ	う	。	。	。	き
い	。	と	こ	。	。	。	、
い	。	も	を	。	。	。	岩
と	。	な	考	。	。	。	場
思	。	く	え	。	。	。	の
い	。	な	さ	。	。	。	海
ま	。	る	せ	。	。	。	岸
す	。	と	る	。	。	。	で
。	。	思	表	。	。	。	「
	。	い	現	。	。	。	こ
	。	ま	で	。	。	。	こ

「こ」の場合、「や・や」は改行せず、行の末尾に入れる。

② 採点項目【満たした項目ごとにそれぞれ加点】

〈内容〉：「自分の意見、主張」がある。(4点) / 「筆者の主張」を踏まえている。(3点) / 「具体的な体験や見聞」がある。(3点)

③ 減点項目【加点されている作文のうち、左記のものを減点】

〈内容〉：本文の抜き出しや要約。(10点減点) / 論旨に一貫性がない。(2点減点) / 〈表記〉：句読点の誤り・誤字・脱字・符号(えんじ)が一つある。(1点減点) / 二つ以上ある。(2点減点) / 〈2点減点〉：最後の一文が途中で終了。(1点減点) / 〈言葉の特徴やきまり〉：不適切な箇所が一つある。(1点減点) / 二つ以上ある。(2点減点)

〈体験・見聞・意見の中心をしぼる〉

「意見を発表する場合では、「意見——伝えたいこと」の中心を一つにしぼる。字数も二百字と少ないので、いろいろな意見を述べると、中心点がはっきりしなくなる。右の例では、①と②の、目を引く表現で書かれた立て札を見たことを体験の中心に据え、後半で、社会全体に「自己責任」の考え方が広まるという意見を述べている。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験や見聞も含めて意見を発表する」という条件の時は、「体験・見聞

↓意見の形か、「意見↓体験・見聞」の形か、二つのどちらかがよい。(右の例は前者) いずれにせよ、「体験・見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験・見聞↓意見」の形の場合は、後に「意見を述べなければならぬので、右の例のように、「体験・見聞の要点①・②」を具体的に、長くなりすぎないように書く。そして、早めに「意見(③)〜⑤」へと移る。「意見↓体験・見聞」の形の場合は、「意見」の要点をやはり、ズバリ簡潔に書く。

